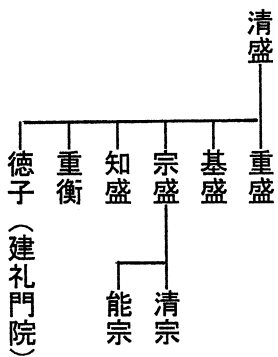


平宗盛はどのような人物か



『平家物語』巻第四「競」

……三位の入道〔源頼政〕、これを聞き、伊豆守〔源仲綱。頼政の息子〕に向つて宣ひけるは、「たとひ金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の乞はうずるに、惜むべきやうやある。その馬速かに六波羅へ遣せ」とこそ宣ひけれ。伊豆守力及ばず。一首の歌を書き副へて、六波羅へ遣さる。

恋しくば来ても見よかし身に添ふるかげをばいかが放ちやるべき

宗盛の卿、先づ歌の返事をばし給はで、「あつばれ馬や、馬はまことによい馬でありけり。されども、余りに惜しみつるが憎きに、主が名のりを金焼にせよ」とて、仲綱と云ふ金焼をして、既にこそ立てられけれ。客人来て、「聞え候ふ名馬を見候はばや」と申しければ、「その仲綱めに鞍置け、引き出せ、乗れ、打て、はれ」などとぞ宣ひける。伊豆守この由を伝へ聞き給ひて、「見に代へて思ふ馬なれども、権威について取らるるさへあるに、あまつさへ天下の笑はれぐさとならんずる事こそ安からね」と、大きに憤られければ、三位の入道宣ひけるは、「何でふ事のあるべきと思ひ悔つて、平家の人どもが、かやうのしれ事をするにこそあんなれ。その儀ならば、命生きても何にかはせん。便宜を窺ふにこそあらめ」と宣へども、私には思ひも立たれず、高倉の宮を勧め申されけるとぞ、後には聞えし。

『平家物語』巻十一「遠矢」

新中納言知盛の卿は、かやうに下知し給ひて後、小船に乗り、大臣殿〔平宗盛〕の御前におはして申されけるは、「御方の兵ども、今日はよく見え候。但し、阿波民部重能ばかりこそ、心変りしたると覚え候へ。頭を刎ね候はばや」と申されければ、大臣殿、「さしも奉公の者であるに、見えたる事もなくして、いかでか頭をば刎ねらるべき。重能召せ」とて召されけり。重能その日の装束には、木蘭地の直垂に、洗革の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。大臣殿、「いかに重能は心変りしたるか。今日は悪しう見ゆるぞ。四国の者どもに、軍ようせよと下知せよ。臆したんな」と宣へば、「何でふ臆し候ふべき」とて、御前をまかり立つ。新中納言は、太刀の柄砕けよと握るままに、「あつばれ、重能めが首打ち落さばや」と、大臣殿の御方をしきりに見参らせ給へども、御許されなければ、力及び給はず。

『平家物語』巻十一「能登殿最期」

さる程に、門脇の平中納言教盛・修理大夫経盛、兄弟手に手を取り組み、鎧の上に碇を負うて、海にぞ沈み給ひける。小松新三位の中將資盛・同じき少將有盛・従弟の左馬頭行盛も、手に手を取り組み、これも鎧の上に碇を負うて、一所に海にぞ入り給ふ。人々はかやうにし給へども、大臣殿父子は、さも

し給はず、舷に立ち、四方見まはしておはしければ、平家の侍ども、あまりの心うさに、傍をつと走り通るやうにて、まづ、大臣殿を海へがばと突き入れ奉る。これを見て、右衛門督〔平清宗。宗盛の息子〕、やがて続いて飛び入り給ひぬ。人々は、鎧の上に重き物を負うたり抱いたりして入ればこそ沈め、この人親子は、さもし給はず、なまじひに水練の上手にておはしければ、大臣殿は、右衛門督沈まば、我も沈まん、助からば、我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして、かなたこなたへ泳ぎありき給ひけるを、伊勢三郎義盛、小船をつと漕ぎ寄せて、先づ右衛門督を、熊手にかけて引き上げ奉る。大臣殿、いとゞ沈みもやり給はざりしを、一所に取り上げ奉りてげり。

『平家物語』卷十一「副将斬られ」

若君（副将。平能宗。宗盛の息子）は、父をはるかに見参らせ給はねば、世にもなつかしげにてぞおはしける。大臣殿、若君を見給ひて、「いかに副将これへ」と宣へば、急ぎ父の御膝の上へぞ参られける。大臣殿、若君の髪かき撫で、涙をらはらと流いて、「これ、聞き給へ、おの／＼。この子は母もなき者にてあるぞとよ。この子が母は、これを生むとて、産をば平らかにしたりしかども、やがてうち臥し悩みしが、つひにはかなくなるぞとよ。』この後いかなる人の腹に、公達を儲け給ふとも、これをば思し召し捨てずして、わらはが形見に御覽ぜよ。さし放つて乳母などの許へも遣すな」と、云ひし事の不便さよ。朝敵を平げん時、あの右衛門督には大將軍をさせ、これには副將軍をさせんずればとて、名を副将と附けたりしかば、なのめならず嬉しげにて、今を限の時までも、名を呼びなどして愛せしが、七日と云ふに、つひにはかなくなつてあるぞとよ。この子を見る度毎には、その事が忘れ難く覚ゆるぞや」とて泣かれければ、守護の武士どもも、皆鎧の袖をぞ濡しける。

『平家物語』卷十一「大臣殿誅罰」

同じき二十三日、近江国篠原の宿に着き給ふ。昨日までは父子一つ所におはせしかども、今朝より引き別つて、別の所に据ゑ奉る。判官、情ある人にて、三日路より人を先立てて、善知識の爲にとて、大原の本性房湛豪と申す聖を請じ下されたり。大臣殿、善知識の聖に向つて宣ひけるは、「さても右衛門督はいづくに候ふやらん。たとひ頭をこそ刎ねらるゝとも、軀は一つ蓆に臥さんとこそ思ひしに、生きながら別れぬる事こそ悲しけれ。この十七年が間一日片時も離れず。今度西国にていかにもなるべかりし身の、生きながら捕はれて、京鎌倉に恥を曝すも、ひとへにあの右衛門督故なり」とて、泣かれければ、聖もあはれに思はれけれども、われさへ心弱うては、叶はじと思はれけん、涙おし拭ひ、さらぬ体にもてなし、……戒保たせ奉り、しきりに念仏を勧め奉れば、大臣殿も、然るべき善知識と思し召し、忽ちに妄念を翻し、西に向ひ手を合はせ、高声に念仏し給ふ所に、橘右馬允公長、太刀をひきそばめ、左の方より大臣殿の御後に立ち廻り、已に斬り奉らんとしければ、大臣殿、念仏を留めて、「右衛門督も已にか」と宣ひけるこそ、あはれなれ。公長後へ寄るかと思えしかば、首は前へぞ落ちにける。

熊野が見た風景

六波羅の地藏堂よと伏し拝む、観音も同座あり……【六波羅蜜寺】

山号は普陀落山で、真言宗智山派。本尊は空也上人人像と伝えられる十一面観音。市の聖と呼ばれた空也上人が、紺紙金泥大般若経六百巻の書写を発願し、応和三年（九六三）八月に完成供養を行った際に鴨川東に建てられた堂（西光寺）が起源とされる。空也没後、僧中信の再興により天台宗の寺院となり、六波羅蜜寺と改名された。法華講や地藏講が行われ、多くの人が参詣した。当寺の周辺には平氏の

邸宅が並んでおり、寿永二年（一一八三）七月二十五日に、平氏が都落ちに際して邸宅に火を放った際には無事だったが、四日後に付近で起った火災により類焼した。本尊の十一面観音立像のほか、木造地藏菩薩坐像、木造空也上人立像、法体の平清盛とされる木造僧形坐像などがある。

頼む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや……【珍皇寺】

山号は大椿山で、臨済宗建仁寺派。愛宕寺とも呼ばれた。本尊の薬師如来は最澄作とされる。篁堂には弘法大師・小野篁・閻魔王の三像を安置する。開基を弘法大師や小野篁とする説もあるが、承和三年（八三六）に山代淡海等によって国家鎮護所として建立された。小野篁は仁寿二年（八五二）に没したが、後に篁の亡霊が当寺に現れたという伝説が生まれた。篁を閻魔庁の第二の冥官としたり、篁が冥府からよみがえったとする伝説もある。当寺が葬地鳥辺野のはずれにあるため、現世と冥界の境とされて伝説が生じたと見られる。この伝説から、盆の九日・十日に参詣する六道詣が行われるようになった。当寺の門前を六道の辻という。小野篁が冥府との往復を果たしたという伝説による。

鳥部山、煙の末も薄霞む……【鳥部山】

東山の阿弥陀ヶ峰を鳥辺山と言い、その麓の北・西・南に扇形に開けた裾野を鳥辺野と言った。平安京開設以来の葬墓地で、当初は都城周囲に葬墓地は点在していたが、次第に鳥辺野に集約された。鳥辺野が洛中よりほどよい距離であること、茶毘に適した傾斜地であること、浄土宗系寺院の建立されたことなどがその理由と考えられる。『源氏物語』などの古典文学作品にも鳥辺野での葬送の話が見られるほど葬送地として知られていた。時代とともに鳥辺野の範囲は狭まり、阿弥陀ヶ峰の北麓だけを指すようになって、今日では清水寺西南の大谷本廟背後の墓地だけを指すようになっていく。

声も旅雁の横たはる、北斗の星の曇りなき……【北斗堂】

珍皇寺の東にあった。寿永二年（一一八三）に建立されたが、建長元年（一二四九）の炎上後は荒廃した。現在は北斗町という町名が残されている。この堂に高灯籠があり、これを柱に掛けて北辰を祭ったという。北極星を天帝、北斗七星を天帝の乗り物などとして重視する信仰があり、これが仏教などと結びついて北辰妙見信仰となった。これらの星に祈ると災厄を免れるとされた。

御法の花も開くなる、経書堂はこれかとよ……【経書堂】

五条坂と三年坂が分岐する角にある。清水寺成就院（北法相宗）末寺で、正式には来迎院という。経書堂と呼ばれるのは、江戸時代の地誌類に「此堂の僧は経木に法華経の文を書いたむけとす。諸人これに経文をかゝせて散錢を布施し、堂の前にて亡者に手向て結縁す」とあるこの寺の信仰習俗に基づくと考えられる。開基は聖徳太子と伝え、本尊の聖徳太子像（十六歳の像。三尺ばかり）も自作とする説が流布している。

そのたらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば……【子安塔】

聖武天皇・光明皇后の祈願所と伝えられるが創建時期は不詳である。子安観音（千手観音）を祀り、名前の通り安産祈願として多くの信仰を集めてきた。高さ約十五メートル、椀皮葺の三重塔である現在の塔は寛永期の再建で、本堂の南谷（錦雲溪）を隔てた丘上に建っているが、明治末年までは仁王門の左手前に建っていた。